



vol.6 これからの夢

最終回 カナダと日本をクラウンで繋ぐ



玉井 良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン（道化師）に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。
www.child-entertainment.net

日本の地下鉄に乗っている時、こんな風景を目の当たりにした事がある。高校生が遠くに立っているハンディキャップを持つ人の話し方や仕草を見て笑っているのだ。その若者の話の内容は明らかに偏見が強く、はっきり言って不快なものだったが、本人は別に悪気がある風でも無かった。

数日経ってもなぜかその高校生の姿が心の中から消える事は無く、事あるごとに浮かんできた。「なぜだろう？」と考えた時に、ふとこう思った。「もし彼が子どもの時にキッズクラウン講座を受けていたら、どうなっていたらどうか？」

日本でキッズクラウン講座を受けてくれた子どもたちは、僕と一緒に実にいろんな所に行き、パフォーマンスをして回った。地域の夏祭り、敬老会でのイベントなどだ。彼らは幼いながら、いろんな場所で様々な人たちが助け合いながら生活している事を知っている。そして僕の知る限り、彼らは出会う人々に対して、手をつないだりおしゃべりをしたりして、いつも通りの笑顔で接している。

キッズクラウン達が大人になった時に、出会う人々に対して、何かしらの偏見を持つという事は、まず無いだろう。キッズクラウン講座に限らず、色々な人たちとふれあえる場が子ども時代にあったかどうかと思う。

「地下鉄の中で見たその若者が「悪気

がない」風に見えたのも、様々な人と接した体験が無いからじゃないかと思った。これは、とても恐ろしい事だなと同時に感じた。

僕は何をするにしても理解するのに時間がかかり、動きもゆっくりしているので集団行動は苦手だった。それは大人になった今も変わってはいない。そんな僕が、オーストラリアに行った時に出会った「クラウン」によって人生が変わった。「短所」は「個性」や「ユーモア」に変わる事を知った。多くの人たちの助けによって「キッズクラウン講座」を開講し、そこでたくさんの子どもの笑顔に出会う事が出来た。今は不安も大きい日本での講座を再開させる事が楽しみで仕方ない自分がいる。

普段の生活では見落としてしまっている子どもの独創性や発想力やユーモアを、キッズクラウン講座で拾えた時は、親も先生も知らない秘密の宝箱を開けた気分になり、とてもとても嬉しくなって飛び跳ねたくなる。子どもの持つ可能性は無限に広がっている。テレビでたまに取り上げられるそのジャンルに特化した天才少年少女達——それなら子どもにも素晴らしいクラウンがいても良いと思う。子どもの笑いは不思議なもので、見る人の心を自然と和ませてしまう。彼らは生まれながら



の天才コメディアンなのだ。そんな彼らといつの日か一緒に世界を回りたい。笑いをたくさんの人に届けたい。日本のキッズクラウン達がカナダに渡って、カナダのキッズクラウン達と触れあえたらステキだなと思う事もある。日本の生徒達の目から見てカナダの生徒達の母国語の他に英語やフランス語を自在に操る姿は一体どう映るだろうか？ カナダの生徒達から見ると、日本の生徒達の場慣れしたステージでの振る舞いは一体どう映るのだろうか？ そんな国際交流の中で、お互いに切磋琢磨し、広がっていく未来は、一体どれだけの夢と笑顔に満ち溢れていることだろうか？ 震災で傷ついた日本を、心地良い笑いでやさしく包み込んでくれるかもしれない。10年後だろうか？ 20年後だろうか？ そんな日が来るのを夢見て、キッズクラウン達とこれから関わっていききたい。

そんな新たな夢が広がっている。